

【研究ノート】

嘉永版『俳諧一茶発句集』全注解(三)

黄 色 瑞 華

凡 例

- 一 本稿は、嘉永版『俳諧一茶発句集』(所収句八二一、他に俳諧歌一八)の全注解である。
- 一 一行めに『一茶発句集』所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に()に入れて注した。
- 一 二行め以下にⓄとして、初出及び他書に所収の有無を書名によって記した。
- 一 句形等に嘉永版『一茶発句集』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。
- 一 語注は簡略を旨とし、必要最小限にとどめた。
- 一 各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も必要最小限とした。
- 一 注釈史上、看過しがたい諸注は、▼以下に記した。ただし、その著者及び書名は、初出においてのみフルネームを記し、以下は「勝峰『名句評釈』」のように略記した。詳しくは、稿末の「参考文献」を参照されたい。

一 茶 発 句 集

春の部(承前)

榎まで春めかせたり啼蛙

㊤ 嘉永版発句集初出。中七「春めかせけり」の誤りか。

▽ 稿本発句題叢、中七「春めかせけり」。発句鈔追加、中七「春めかしたり」。希杖本句集、上五・中七「榎立春めかせけり」。

注 「榎」、ニレ科の落葉高木。初夏に淡緑色の小さな花をつける。江戸時代、街道の一里塚に植えた。

解 蛙が盛んに鳴きはじめて、榎までが春めいて見えることだ、の意。

親分と見えて上座に鳴蛙

㊤ 八番日記(文政2・2)

解 蛙が居並んで鳴いている。一段と高い所を占めているのが親分だろう、そう思っただけで見れば、いかにも堂々としているよ、の意。

▼ 黒沢『研究』に、「ただ親分と見えてといふ初五中七の句は彼一茶の一茶たる表現法で、常に彼の人間性が階級意識として、どの句にも強く響いてゐるところであります」。

向くに蛙のいとこはとこかな

㊤ 七番日記(文化10・1)・文政版発句集

▽ 浅黄空・自筆句集、上五「車座に」。

解 それぞれ勝手な方を向いている蛙、だが、どの顔もよく似ている。それを血縁のゆえ、とみるのである。

▼ 川島『新釈』に、「田に水が入つて、蛙の出盛る頃、べたくと並んでガチ／＼鳴連れてゐる様であらう。蛙の数を現すために、『いとこはとこ』といふ種属の繁栄を思はせる語を持つて来たのは、余程考へての上らしい。それがいかにも蛙のそれらしい消息を伝へて居ることは面白い」。黒沢『研究』に、「何とも云はれない新鮮な青葉の光り、蒼い鋭い高原の空の下、みんな如才ない顔をして三々五々並んでゐる——余はこの一絵面から、かの釈迦の涅槃会の絵面を想像してゆくのではありません、さうして初めてこの句の壮嚴さの意味がわかつて来るやうに思ふのであります」。勝峰『名句評釈』に、「玆にも一茶の深い動物愛を見る。蛙に『いとこはとこ』などといふ言葉はなか／＼出て来るものではない。(中略)『向々』といふ言葉も蛙にこそふさはしい。句その物には何等の思想もなければ背景も無い。只一茶の動物愛が漲りわたつてゐることを知れば足る」。

めでたさの煙聳^(え)へて啼蛙

㊤ 七番日記(文化12・2)・浅黄空・文政版発句集

注 「めでたさの煙」、野焼き・山焼きの煙と見るよりも、神社の春祭りの準備に、境内の落葉や枯草などを焼く煙と見る方がよからう。

解 ようやく春祭りの時期。境内から立ち昇る煙、蛙の声、ああ春だなあ、の意。

我を見て苦いかほする蛙かな

㊤ 文化句帳(文化5・1)・文政版発句集

解 人の顔を見て苦い顔をしているよ、この蛙は、の意。

象がたや桜をたべて鳴蛙

㊤ 文政版発句集・希杖本句集

▽ 稿本発句題叢、中七「桜もたべて」。七番日記(文化1・8)・我春集、中七「桜を浴て」。

解 さすがは象潟の蛙、桜をたべて鳴き声をたてているよ、の意。「象潟の桜は波に埋もれて花の上こぐ蟻の釣舟」(伝西行歌)に思い合わせたものであろう。

玉川やまづ御先へと飛かはづ

㊤ 自筆句集・文政版発句集

▽ 七番日記(文化13・1)、上五「山吹や」。浅黄空、前書「深川芭蕉庵の跡拝見して」。上五「古池や」。

解 玉川べりへ足をのぼすと、足もとから蛙が「まず御先へ」と言わんばかりに次々に飛び込んだ、の意。「古池や蛙飛びこむ水の音(蛙合)が念頭にあった。

いうぜんとして山を見る蛙かな

㊤ 七番日記(文化10・1)・句稿消息、おらが春・浅黄空・自筆句集・文政版発句集・希杖本句集

▽ 七番日記以下いずれも上五「ゆうぜんと」。

注 「いうぜんとして山を見る」、陶淵明の「飲酒詩」(『古文真宝前集』など所収)中の詩句「採_ニ菊_ヲ東籬_ノ下_ニ、悠然_{トシテ}見_ニ南山_ヲ」ふまえる。

解 悠然として山をあおぎ見る蛙。陶淵明先生もかくやありけん、の意。詩仙の境を思わせる中七までに対する座五の取り合わせ、そこに独自の俳諧がある。

▼ 句稿消息、成美の評は「蛙になしたる所妙」。川島『新釈』に、「一茶は蛙を多く扱って居るが、蛙の姿を写したものとてこの句に止めをさしてよからう。鑑賞者は勝手な山を描いて、作者と共に悠々とした蛙の姿を覗いて呉れれば充分である。私はたゞ黒姫飯綱妙高の三山の眉間に聳える彼の郷里の道端の景色などを想像に入れて見るのである」。黒沢『研究』に、「この一句などは何としても信濃の草原と、山脈を知らぬ者にはびたりとこないに相違ありません。悠然見山といふの

は支那の古詩にある句で隠者の心持、気取つた處士の気分であります。ところが、一茶の句として考へたときに、さうした概念は跡もなく失くなつて、唯、ある生々しい実感に襲はれるのみで御座います」。勝峰『名句評釈』に、「『菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る』(陶淵明) から来ていることは言ふまでもなく、否『悠然として山を見る』迄は詩仙をそぞろ回想させて置いて、突如『蛙』を出したのは修辞学に所謂頓降法で、かの落語家の常套手段である。一茶の突梯滑稽であり、読下破顔微笑せしめるものである。尤もこの句をさうした引用法と見ないで書かれたまゝの一風景と見ても無論十分に成立する。前足をついてじつとしてゐる姿は正に悠然として山を見る姿である。之を人間とすれば帰去来曲を奏した五柳先生その人でなくてはならぬ」。頼原『俳諧名作集』に、「前肢を突張つて、洒蛙々々然とした面構で山を望んで居る蛙。誠に悠々然たる態度である。陶淵明の詩句を利用したのが、単なる技巧に陥らず、閑日月を楽しむ隠士の風手をも想望されて面白い」。暉峻『鑑賞』に、「陶潜の雑詩(中略)に據ると言はれてをりますが、さういふ出典がなくても、この句は十分に蛙の姿を描き得て妙なるものであります。『悠然として山を見る』までは、詩仙の風貌を思はせておいて、次に突如として蛙を出した滑稽味も賞すべきです」。勝峰『評釈おらが春』に、「手を揃へて膝を支へ、白い腹をふくらせて、沈黙する蛙の姿には、無想の行に入つた人の趣がある。(中略)二字をこれ(注、陶淵明の詩句)から取つたと云つても、彼の個性はこの句に於いて傷けられないのである」。荻原『一茶篇』に、「一茶の蛙の句は、ほかの動物の句にもさういうのが多いが、蛙を人間のように見ているのが多い。こどもの漫画のような感じである」。川島『おらが春新解』に、「陶淵明の詩句を借りているが、物に動ぜぬ大蛙の姿態をさながらに眼前せしめる」。宮本『大鑑』に、「一匹の蛙がちよこんと前肢をつけて静かにじつとして動かない。その向こうに山が見える。その落ちつきはらつた姿を、有名な陶淵明の詩句(中略)によって、擬人化したところに、蛙の姿態を眼前に浮かべるとともに何ともいえぬユーモアを感じさせる」。

其声もひとつ踊れ啼蛙

㊤ 八番日記(文政2・3)

解 奇妙なかつこうで跳びあがった蛙。それが腰を据えて鳴き出した。「もひとつ踊」って見せよ、の意。精神的・経済的安定期に見られる典型的な句である。

産さうな腹をかゝへて啼蛙

我庵や蛙初手から老を啼

㊤ 八番日記(文政4・1)

▽ 八番日記(3・9)、上五「産みさうに」

解 出産間近かの妊婦を思わせる、大きなお腹を前肢でささえるようにして鳴いているよ。この蛙は、の意。

㊤ 七番日記(文化8・1)・我春集・発句鈔追加

▽ 稿本発句題叢・希杖本句集、上五「我門や」。

解 我庵に来て鳴く蛙は、主人である私の心を知ってか、「初手から老を」歎くような鳴きようだ、の意。

南都

朝起の古風を捨ぬ乙鳥かな

㊤ 文政句帳(文政8・9)・文政版発句集

注 「朝起の」、早起きの、の意。

解 古来からのよき風習を残している古都奈良。つばめもそのよき風習を今に伝えている、の意。

夕乙鳥我には翌日のあてもなし

㊤ 近世発句類題集(文政3)

▽ 文化句帳(4・2)、座五「あてはなき」。稿本発句題叢、座五「あてもなき」。発句鈔追加、中七「我のみ翌の」。

解 夕空にはばたいて虫をあさっている燕たち、それぞれが生の営みに充日の日を送っている。それにひきかえこの自分は、

の意。精神的・経済的に苦難の底にあったこの時期、日記には孤独と望郷、そして貧窮を歎く句が不連続線状に見える。

▼ 川島『新釈』に、「明朝起きて腹をこしらへるあてもない呆然とした心の前に、夕燕が忙しさうに出つ入りつ活動して居る様をうつりと眺めながら、作者は燕に対して稍々羨しさを感じて居る」。丸山『小林一茶』に、「夕闇迫る軒端に、白い腹を翻えして、忙しげに出つ入りつしている巢燕。それを茫然と見守っているうづけたような顔。一茶の深い溜息が聴かれるような句だ。燕の群れは嬉々として生の営みに忙しく飛びまわっているのに、自分には助け合うべき肉親も、定まった職ともなく文字通りその日暮しのあけくれである。明日のあてもないとは、偽らぬ実感であろう」。加藤『秀句』に、「軒の下あたり、軽快に飛び入り飛び去る燕を仰いでいる一茶の呟きが聞こえてくる。(中略)何か明日のために息いっぱい働いているものさびしさの前に、遊民として扱われながら、自分にもしかとした明日の目的もない一日を迎え一日を送る」。宮本『大観』に、「春の夕暮れ時、軒端の燕の巢には親燕が子のため餌を運んでは出つ入りつ、身をひるがえし忙しげに、いかにも生き生きと飛び交うている。その燕の生の営みの姿を見るにつけ、自分には定まった家もなく、職もなく、しかとした明日の目的も希望もなく、その日暮らしのあけくれである。一茶には孤独と貧困のわが遊民生活につくづく溜息がもれるのだ」。前田利治「古典俳句を学ぶ」(井本・堀編、有斐閣選書、昭52)に、「春の夕暮れの空を飛び交う燕をみての即吟で、日没とともに巢にもどり、やがて子を育てて南へ帰ってゆく習性を思い、わが身が省みられて吐息まじりに詠んだ真率の作吟である」。

昼めしをたべにおりたる雲雀哉

㊤ 七番日記(文化10・3)・志多良・句稿消息・稿本発句題叢・浅黄空・自筆句集・文政版発句集
 解 さきほどまで天空に舞っていた雲雀、その姿は今はない。昼食をたべに降りているのだろう、の意。

横乗の馬のつゞくや夕ひばり

㊤ 八番日記(文政2・3)・おらが春・文政版発句集
 ▼ 八番日記(文政2・2)、座五「夕がすみ」。
 注 「横乗」、背にまたがらず横向きに、いすに掛けるようにした乗ること。

解 「馬のつゞくや」とあるから、農耕馬ではなく、駅伝の荷送りをすませた駄馬であろう。迎えに出た子供を横乗りにした馬が続く。「夕ひばり」という季語の趣味に統一されて、のどやかな春の夕べ、そこにある人心をよく描き出している。

▼川島『新釈』に、「春の農事に馬を使用するのは、多く田をおこすこと、田に水が入つてから代しろかき時にも使はれるさうである。一日の耕作に疲れて、然し快い労働のあとのゆつたりした気持で、農夫達が裸馬に横乗りして三々伍々家路を指して行く。道のほとりの麦畑には、時をととのへる雲雀が姦しく鳴連れ飛交うて居る。落方の陽は長閑に馬上の人の頬被りを染めて居ることであらう」。勝峰『名句評釈』に、「街道か―無論雲雀が嘯り暮してゐるので田舎街道―野中の道か、馬上の人物は何者かで情趣がそれ〴〵違つて来よう。『横乗』とあるから武家筋ではない。やはり農作を終へた百姓が煙管を啣へなどして、帰路を共にしての一行であらう。一日を鳴きつくした雲雀も最後の奏曲を天降らしてゐる」。暉峻『鑑賞』に、「一日の耕作を了へた農夫の家族達が、夕霞の中を三々伍々引上げて行く。そしてどの群も、恐らく疲れた女子供が乗つてゐるのであらう裸馬を索いてゐる。(中略)労働の後の快い疲労感と、夕霞の哀感が、如何にもしつくりととけ合つてゐます」。勝峰『評釈おらが春』に、「一日の御用と駄賃を稼いで、それ〴〵の家に戻る助郷馬であらう。つゞくが徴発された馬を思はせ、夕雲雀が御用を勤めての帰りなることを推量させる。(中略)馬は厩への道を覚えてゐるから、手綱を捌かずともよい。乗人は銜のりてへぎせるかなんかで、暢気に揺られて行く。(中略)横乗の馬は雲雀野の背景であるが、『つゞく』の複数で没色彩の表現を賑はす春の晩景にもなる」。川島『おらが春新解』に、「駅伝の送荷をすませた駄馬の列であらうか。馬子たちは一日の労働に疲れて、しかし、ゆつたりとした解放感を味わいながら、はだか馬に横乗りして各々の家路をさして行く、道のほとりの麦畑には、ねぐらをととのえる雲雀がかしましく鳴きつれ飛び交うている。(中略)『つゞくや』に、数頭もしくは十数頭を眼前せしめる見渡しの広さがある。遠く山をめぐらす善光寺平あたりが想起されてくる。いわゆる一茶調でなく、銜のりて気をはなれた、おだやかな景観の世界である」。宮本『大観』に、「宿駅常備の人馬の不足を臨時に補なうために徴発された助郷馬などであらう。夕雲雀がのどかに嘯っている麦畑などを背景に、一日の御用を勤め終えた馬が何頭か続いて帰ってゆく。馬上の人は銜のりてえぎせるか何かでのんきに馬の背に揺られてゆくといった春の夕暮れの情景である」。

野大根も花となりけり鳴雲雀

④ 稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加
 ▽ 文化句帳(文化1・3)、中七「花咲にけり」。
 解 雲雀鳴く春の日、だれにも相手にされなかった野大根もようやく時をえて、花をつけているよ、の意。「野大根」に自我を投影したところが一茶らしい。

それ虻に世話をやかすな明り窓

④ 文政版発句集

▽ 七番日記(文化14・8)、座五「せうじ窓」。

解 明り窓の障子に虻が一匹、当っては跳ね、跳ねては当たっている。明り窓よ、そんなに虻に世話をやかさせるなよ、の意。

神風や虻がをしへる山の道

④ 文政句帳(文政5・3)・文政九、十年句帳写・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

▽ 文政九、十年句帳写、前書「奉納」。浅黄空、前書「虻」。

解 文政九、十年句帳写の前書に「奉納」とあり、どこかの神社に奉納したもののか。山中の社に参ろうとして、行き惑っていると、虻が一匹先に立って道案内をしてくれる、これも神の御威徳によるものか、の意。「神風(や)」は、伊勢・御裳濯川・五十鈴川などに掛る枕詞。それを「虻」に掛けるといふ大胆な俳諧。

小男鹿に手拭かさん角の跡

④ 七番日記(文化10・1)

▽ 志多良・句稿消息・稿本発句題叢・浅黄空、上五「さをしかよ」。

解 角の落ちたさ牡鹿よ、手拭いを貸そう。これで頬被りするがいい、の意。

▼ 句稿消息、成美の評は「是は御家のもの」。川島『新釈』に、「春の末から夏にかけて、成長し尽した鹿の角は自ら落ち

小男鹿の落した角を枕かな

る。そして、跡には瘤のやうな二つの隆起を残すばかりの間抜けた、恥しげな男鹿を云つたものである。私はこの句を非常に面白いと思つた時代があつた。(中略)然し、今は斯ういふ句を余りよいとは思へなくなつた。要するに作り物であるやうな気がする。嫌とは言切れないまでも、私はたゞ作者の奇想に対して軽い微笑を以て応へることに止めておかう。黒沢『研究』に、「その小鹿、しきりに一茶は脊を撫でよやつてゐたのです。さうして角の落ちた両鬢の凹みは見るに堪へられなく痛々しさを感じられるのです、ほんとうに手拭貸してやりたい程なのでした」。

㊤ 梅塵本八番日記(文政3)
 ▽ 風間本八番日記(文政3・3)、上五「大鹿の」。

解 さ牡鹿は抜け落ちた自分の角を枕にしているよ、の意。抜け落ちてある角のあたりに、四肢を曲げて寝そべっているのであろうが、この場合細かな詮索は無用である。

角おちて恥しげなり山の鹿

㊤ 八番日記(文政3・3)
 解 威勢を誇っていた角が抜け落ちたあとの牡鹿は、何か恥かしげな顔をしている、の意。
 ▼ 黒沢『研究』に、「芝草のかげには恥かしげに膝折つて遠く道行く人をながめてゐる鹿もありました、樹立にかくれきつてゐるのもありました。けれども、角の失くなつた鹿は一層可愛らしく痛々しかつたのです」。

奉納

おんひらく蝶も金比羅参りかな

- ㊤ 文政句帳(文政6・4、同7・5)、自筆句集・浅黄空・文政版発句集
- ▽ 文政版発句集のみ前書「奉納」。
- 注 「おんひらく」、金毘羅参りの咒文「唵阿毘羅吽欠」(オンアビラウンケン)に擬した。
- 解 蝶が一人の前になり後になり、石段を昇って行く、お前も金毘羅詣にやってきたのか、「オンアビラウンケン」、「オンアビラウンケン」。

蝶飛や此世に望みないやうに

- ㊤ 文化三―八年句日記写(文化6)
- ▽ 文化三―八年句日記(文化6)、中七「此世の望み」(27句後に出)、稿本発句題叢、中七「此世〔脱〕望ミ」(叢書本、「此世〔に〕望ミ」と校訂)。文政版発句集、中七「此世の望ミ」。
- 解 あてどもないままに宙をふらふらと飛ぶ蝶、いかにもこの世に望みがない様子だ、の意。飛ぶ蝶に託した孤独の心象とみてよからう。

むつましや生れ替らば野辺の蝶

- ㊤ 七番日記(文化8・1)・我春集・発句鈔追加・希杖本句集
- 解 睦ましいことであるよ。生まれ替ったなら、せめてあの野辺の蝶でありたい。前出句同様、孤独の心象を表現したものである。

大猫の尻尾でなぶる小蝶かな

- ㊤ 八番日記(文政2・1)、おらが春
- ▽ 七番日記(文化15・9)、中七「尻尾でじやらす」。
- 注 「なぶる」、煽る。からかいひやかすこと。

解 ごろりと横になっている大猫。時折り尻尾を動かして、あたりを飛び交う蝶をもてあそんでいるようだ、の意。

▼ 川島『新釈』に、「大猫といふのは、のさり／＼として、いかにも凶々しい感じを与へるものである。小蝶が側近く飛んで来てもチットも騒がず、時折太い尻尾を懶げに動かして追払ふやうにして居る。それが恰度小蝶をぢらして居るやうに見えるのである。小蝶は近寄ることも出来ず、さりとて逃げもせず、猫をめぐつてむら／＼と飛び廻つて居る。(中略)但、これが一茶の句であるだけに、『大猫』『小蝶』の取合せが一寸気になるのは、余り神経過敏過ぎるかも知れない。勝峰『評釈おらが春』に、「虚寝入りの臉を折り／＼ひらくと、銀の針のやうな瞳孔が横睨みに鋭く光つて、踊りかゝる姿勢を取つて、悠々その長い尻尾を振つて見えては誘惑する猫である。敵に廻つて罅られる風をよそほひながら、蝶は蝶ですこしの隙もあたはず、動く尾へ近寄つては離れつゝ、かへつて猫をからかふやうな舞ひ振りである。猫には大、蝶には小の冠頭詞を殊更に加へたのでなく、凶体の自然に大きな猫であるとき、蝶の小さい存在が対照的に美しい」。川島『おらが春新解』に、「どさりと寝ころんで、小蝶が側近く来ても一向にさわがず、時折太い尻尾をものうげに動かして追払うようにしている。それがちやうど小蝶をじらしているように見えるのである。小蝶は近よることもできず、さりとて逃げもせず、猫をめぐつて飛びまわっている。うすら眠い春昼の情景である。但し『大猫』『小蝶』の対照は意識して置かれてあるもののようにである」。川島『一茶集』に、「大猫のずぶとげな動作。そば近くやってくる蝶を時々太い尻尾で追ひ払うのが、なぶっているやうに見えるのである。この大小の用字は心無しにおかれたのではあるまい」。

蝶寝るや草ひきむしる尻の先

㊤ 嘉永版発句集初出

▽ 風間本八番日記(文政3・2)、全集本・資文堂版とも座五「尾の松」。梅塵本八番日記(文政3)、上五「てふ飛や」。

解 後さがりに畑の草を引きむしっているその人の尻のあたりに、蝶は何事もないように静かに止っている。

葎からあんな蝴蝶の生れけり

㊤ おらが春・自筆句集

▽ 八番日記(文政2・2)、中七「あんな」小蝶が。李園あて書簡(文政2・2・15付)・浅黄空・文政版発句集、中七

「あんな小蝶が」。八番日記(文政2・3)、上五、中七「塵塚にあんな小蝶が」「芥からあんな小蝶が」。

注 「葎」、ごみ溜めのような所に好んで生える。
解 葎が繁茂しているごみ溜めから、あれよ、あんな上品な蝶が生れ出た、の意。『一茶七部集』(勝峰晋風編、大14・古今書院)に、「売られ行く女、一茶画賛」として、「むくらからあんなこてふが出たりけり」が収めてある。「ごみ溜めの鶴」「はき溜めの鶴」が念頭にあったことは否定しがたい。

▼ 川島『新釈』に、「足の踏場もなく一むら茂つた叢の中から、ふいと小蝶が飛出した。真実それが其処から生れ出たものか如何か問題ではない。恰度生れ出たやうに突然と舞立つたのである。その不意の小蝶の美に打たれて、瞬間、作者は自然界の驚異に目醒めて居る。(中略)此所まで来ると、一茶小手先の技巧はすっかり抜け切つて居る」。勝峰『名句評釈』に、「足の踏み処も無いまでに乱雑に生ひ茂つた雑草の中から、あれ／＼、胡蝶がひら／＼と舞ひ出たのが一茶の目に入った。(中略)何かの精か化身でもあるかの様に、今新たに生れ出て来たかの様に一茶の目には映つたのである。その驚きにも似た直観が一茶をして、突嗟に『あんな胡蝶が、あんな処から生れ出たわい』と言はしめたのである。真淵の『うら／＼とどけき春の心より匂ひいでたる山桜花』の名歌や、丈草の『大原や蝶も出て舞ふおぼる月』と相並べてよい佳句である」。勝峰『評釈おらが春』に、「雑草の繁る藪を引つくるめて葎と呼ぶ地方もある。(中略)いぶせき葎の上に舞ふ蝶への同情は、一茶に取つて後に画賛でも乞はれた時の孕句となつたのである。あんなの俗語に指さしながら見惚れる一茶の横顔が見える」。川島『おらが春新解』に、「本末もわからず繁茂しているむぐらの中から、あれあのような蝶が生まれ出た、というのであるが、見どころもないむぐらに対して、『あんな』が対蹠的な美しさを暗示している」。

田に畑にてん／＼舞の小蝶かな

㊦ 句稿消息・文政版発句集

▽ 七番日記(文化11・1、15・2||重出)・浅黄空・自筆句集・上五「麦に菜に」。

注 「てん／＼舞」、「てんでこまい」の意であろう。

解 田に畑に、蝶はてんでこまいの大いそがしさだ、の意。

▼ 句稿消息、成美の評に「てん／＼舞めづらし。是は貴翁の例の案じ場也」。

門の蝶子が這へば飛はへばとぶ

㊤ 文政版発句集・真蹟

▽ 浅黄空・自筆句集・梅塵抄録連句集(一茶・素外両吟歌仙、文政7・2)、上五「庭の蝶」。

解 地面を這っている子供であろう。子供が動かたたびに、蝶がふわりと舞いあがる、の意。

▼ 萩原『一茶春秋』に、「一茶は一筆がきの藁屋を描いて、その上に此句を讚することを得意としてゐたらしい。さうした
 図柄の肉筆が沢山残つてゐる。庭に筵でも敷いて、まだ立つことの出来ぬ赤子を遊ばしてゐる。草に蝶がとまつてゐる、赤
 子が蝶の方へ這うてゆくと、蝶は一寸飛び立つ、けれども飛去るのではなくて、又、目の前にとまる、赤子が又、その方へ
 近づくと、蝶は又飛び立つ……丁度、ここまでおいで、甘酒進上とても云ふやうに……である。(中略)恐らく、門人の家
 かなぞで作つた句であらうと思ふ」。

小男鹿や蝶をふるつてまた眠る

㊤ 文政句帳(文政7・3)・自筆句集・文政版発句集・発句鈔追加

解 袋角か目のあたりにでも止つた蝶であろう。敏感な牡鹿は目を細く開けて、それを払いのけるようにしたが、蝶が舞い
 あがると、再び目を閉じた。もちろん、四肢をたたんだ鹿でなければならぬ。

▼ 加藤『秀句』に、「袋角などにとまつた蝶を頭を振るつてたせ、またしずかな眠りに入るところで、まことに穏やかな
 気分である。(中略)この句は、落ちる前のいかめしい角では少し仰々しくなってしまうし、蝶が皮膚にとまつたと考えた
 のでは、犬や馬と選ぶところがなくなつておもしろくない」。

気の毒やおれをしたふて来る小蝶

㊤ 八番日記(文政3・2)

▽ 梅塵本八番日記(文政3)、上五「何の気や」。

解 蝶が一つ後からついてくる。枯れきつたこんな老体を慕つても、露一滴出やしないのに、の意。

てふといふ娘山路の案内しけるに、俄雨はらくとふりければ

木の陰やてふとやどるも他生の縁

㊤ 文政版発句集

▽ 前書末尾「はらくふりければ」。文政句帳（文政8・2）、前書「小娘の山路の案内しける、一むら雨のさと降りければ」。中七「蝶と休むも」。

解 にわか雨に見舞われて、路案内の小娘と木の陰に雨やどりすることになった。これも他生の縁というものだろう。前書によって、小娘の名「てふ」に「蝶」を掛けていることがわかる。

橋本町上人

陽炎や歩行ながらの御法談

㊤ 七番日記（文化15・4、同帳外Ⅱ重出）・八番日記（文政2・1）・浅黄空・文政版発句集

▽ 七番日記（15・4）、前書なし。七番日記（帳外）、前書「題橋元町聖人」。八番日記、前書なし。浅黄空、前書「橋本町住僧」。文政版発句集、前書「橋本町上人」。

注 「橋本町」、江戸日本橋橋本町。願人（注、物乞い）坊主の長屋があった。七番日記（15・4）、「橋元町」と前書した「御仏や乞食^町にも御誕生」もある。

解 陽炎の立つ暖かき、願人坊主が何やら語りながら行く、の意。

かげろふや臼の中からま一筋

㊤ 七番日記（文化10・1）志多良・句稿消息・文政版発句集

解 陽炎が立つにはまだ早い時間、一臼つき終った臼から「ま一筋」に湯気が上っている。あるいは、ふかしたての、せいろ

から臼に移された米から上がる湯氣を言ったものか。

▼ 句稿消息、成美の評に「臼も久しい物なれども一筋にて大によろし」。川島『新釈』に、「真一筋」といふ坐五に非常な力の籠つた作である。使ひつゝある臼か、これから使はうとして濡らせてある臼か、それよりも、軒下などに出し放しにして昨夜の雨に濡した臼といふやうな感じがびつたりとする。輝かしい春の朝日がカツと照込んで、臼の中から立登る水蒸氣が一団となつて、円柱のやうに眼の前に揺めき登つて居る。神經の弱い者は眼の昏みさうな、はげしい陽春の氣象が感ぜられる。一体、陽炎は自由な連想を誘ふよい季題であるが、このやうに太い線で陽炎そのものを率直に表現してある句は珍しいのである。暉峻『鑑賞』に、「軒下などに出しつ放しにしてあつて、湿つてゐた臼に、春の朝日がカツと差し込んで、水蒸氣が一団となつて真一文字に立ち昇つてゐる、激しい春の朝の陽氣であります。一体『陽炎』は、和歌時代からはかない長閑なものとして扱はれる場合が多いのでありまして、この句のやうに、激しい、力強いものとして扱はれることは、全く珍らしいのであります」。

長閑さや垣間を覗く山の僧

㊤ 嘉永版発句集初出

解 のどかな春の昼さがり、所在なさに垣の外にぼんやりと目をやる山の僧、の意。

陽炎や子をかくされし親の顔

㊤ 嘉永版発句集初出

▽ 文化句帳(文化3・1)、中七以下「子をなくされし鳥の顔」。

解 「子をかくされ」たのは鳥であろう。陽炎の向うにその顔がゆがんで見える。

長閑さや浅間けぶりの昼の月

㊤ 八番日記(文政2・1)・発句鈔追加

▽ 中七「浅間のけぶり」の誤りであろう。八番日記（風間本・梅塵本とも）・発句鈔追加、中七「浅間のけぶり」。
 解 浅間山頂からはゆったりと煙りが立ちのぼり、白っぽくぼんやりとした姿を見せている月の方に流れている。
 陽炎や手に下駄はいて善光寺

㊤ 八番日記（文政2・4）・希杖本句集

▽ 梅塵本八番日記（文政2）、前書「居去」。

解 主体は梅塵本八番日記の前書にあるとおり。そういうかっこうで、と見るべきであろう。

▼ 黒沢『研究』に、「高原の雪も消えははてゝ若草萌ゆる頃、多くの人々は皆善光寺詣りをします、ところが此処では跛者が手に下駄はいていざり歩いてゆくといふのであります。寒川鼠骨氏はこの句を滑稽句として評釈してゐますが一茶には跛者を集めて眺めてゐるほど惨忍にはなれない性分でした、一緒に手に下駄はいて苦しんでゐるのであります」。頼原『俳諧名作集』に、「うらゝかに陽炎もゆる春の日、長野の町には善光寺参りの善男善女が引きつゞいて居る。その中に覺までが手に下駄はいてお詣りに出かけてゐるといふのである。『手に下駄はいて』がやはり一茶らしい見つけどころである」。

凧あげてゆるりとしたる小村哉

㊤ 七番日記（文化13・3）・句稿消息・某人あて書簡（文化14・3・3付）・文政版発句集

解 数軒ずつ寄りそのように軒を並べている小村、凧が上がる季節になって、のんびりとした空気に包まれている、の意。

美しき凧あがりけり乞食小屋

㊤ 稿本発句題叢・文政版発句集

解 乞食部落同然の貧しい村の空に、今日は美しい凧があがっている、の意。天上の凧と地上の乞食小屋が対比されている。

我時た種をやれくけさの露

④ 七番日記(文化10・1)・志多良・文政版発句集
 ▽ 七番日記、上五「我蒔〔た〕」。句稿消息、中七「種もやれく」。
 解 菜の種でもあろうか。種を蒔いたあと、芽がでるだろうかと心配していたが、今朝の露を見て「やれやれ」これで大丈夫、の意。

かまくらやむかしどなたの千代椿

④ 文政版発句集

▽ 七番日記(文化10・2)、中七「実朝どの」。同(10・3)、中七「どなたが春の」。

解 鎌倉に来て、枝もたわわに花をつけた椿の古木が目に入った。これは、いったい昔どのようなお方の庭だったのだろう。

菜の花や霞の裾に少しづつ

④ 七番日記(文化11・3)・句稿消息・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

解 霞が立ちこめた、その裾のあたりに菜の花が少しづつ黄色い色を見せはじめている、の意。

▼ 句稿消息、成美の評は「光琳が画意」。

陽炎やそばが前の箸の山

④ 文政句帳(文政6・5、同7・1 || 重出)・梅塵抄録連句集(一茶・梅塵両吟歌仙 || 文政7・2。一茶・梅塵・蘭腸・幻一、表六句 || 文政7・2)。

解 蕎麦屋の前に、客の使った割箸が積み重ねるようにして置かれている。陽炎の立つ季節になって、日ごとに人出が多くなつた。重ね置かれてある箸のあたり、そこから立ち昇る陽炎、おだやかな春の訪れとともに、人の心もやわらいでくるのである。

▼ 暉峻『鑑賞』に、「今でも見得る都市風景で、蕎麦屋の前に客の使った割箸を洗つて、山のやうに積み上げてある。そこ

へ春の陽が差して、ゆらゆらと陽炎が立ち昇つてゐる。春の巷ののどかな一情景です」。

小金原

呼あふて長閑に暮す野馬哉

㊤ 八番日記(文政3・3)・浅黄空・自筆句集

▽ 八番日記・自筆句集、前書なし。

注 「小金原」、下総小金。官馬の放牧場。上野牧・中野牧・下野牧などの総称。『寛政三年紀行』三月二十九日の条に、この放牧馬のことを記す。

解 広い小金の放牧場。馬の親子は、時折り声を立てて互いの所在を確認しあい、ゆったりと暮しているよ、の意。前年六月、長女さとが夭折している。

かるた程門の菜の花咲にけり

㊤ 七番日記(文化10・1)・句稿消息・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

▽ 志多良、中七「門の菜畠も」。

解 花がるたを広がるげたように、庭畑の菜の花がいつせいに咲きそろったよ、の意。

▼ 川島『新釈』に、「可愛い景色である。同じ一茶の『苗代は庵のかざりに青みけり』と、殆ど同景の着想であるが、この『かるた』といふ思ひ付きを、作者はひどく興がったものであらう。面白味もねうちも要するに其処にある」。

大菜小菜喰ふそばから花咲ぬ

㊤ 七番日記(文化11・3)・斗圍あて書簡(文化11・3)句稿消息・文政版発句集

注 前年採り残した菜は、春いっせいに花をつける。それを苔のうちに摘み取って食する。摘み取った芽の脇から、また芽を

出して花をつける。

解 菜の花は摘み取って食する。あとから、あとから花をつけてとても食べきれないほどだ、の意。

春の日や暮ても見ゆる東山

㊤ 文化句帳(文化2・1)・文政版発句集

解 「春日遅々」、春の日は暮れるにおそい。もう、とつくに日暮れの時間なのに、東山はそのなだらかな峰を夕暮れの空に残している、の意。

▼ 加藤『秀句』に、「山によって春の日の暮れたばかりのゆたかさの生かされた佳句」。

三助がはつせ詣やはるの雨

㊤ 八番日記(文政3・1)

解 春雨に誘われて、寺社詣などには縁のなさそうな顔をした三介ふうの男までが、長谷寺詣でにやって来た、の意。

傘さして箱根越すなり春の雨

㊤ 七番日記(文化15・3、同・12 II 重出)・浅黄空・文政版発句集

解 箱根路は天下の難路。あれ、傘さして越えて行く者があるよ、の意。実体験によるものではなからう。

▼ 荻原『一茶名句』に、「箱根の山八里の道は昔から険阻と云われている。だが薩摩下駄をはいても越すことができる。この句はまさか下駄ではなく、草鞋がけであろう。旅人としたならば、雨具としての笠や合羽も用意してであろう。だが、湯本から三島まで、ちょっと用足しに行くというような土地の人ならば、傘をさして歩くこともありそうである。一茶自身は旅人としても、そのような傘をさしてゆく人と連れ立って、箱根を越したとすると、いかにも『春の雨』らしく、のどかな気持である」。加藤『秀句』に、「春の雨を浴びながら山を越えるのだが、この句『傘さして』が一茶の狙いである。春の雨の中、箱根路を越えたというだけでは何の奇もないのだが、町中を行くのと変わりない姿、『傘さして』この難路を

越えるというところが句の眼目であった」。

朝市に大肌ぬぎや春の雨

㊤ 八番日記(文政2・1)

▽ 上五「朝市の」の誤りであろう。風間本・梅塵本とも、上五「朝市の」。

解 大肌ぬぎの朝市の男。その肌に春雨が当たって皮膚が光っている。威勢のよさだけではなく、気風のよさまでが読み取れよう。

掃溜^(溜)の赤元結やはるの雨

㊤ 八番日記(文政2・2)

▽ 上五「掃溜の」。

注 「元結」、髪を頭の頂近くに束ねるところを結ぶ緒。少女が用いる赤い紙漉製の元結であろう。

解 掃溜に捨ててある赤い元結に、春の雨がふりかかっている。春雨にぬれた赤い元結。そこには何か妖艶な世界をも連想させるが、これは成立時期からみて、長女さとが赤い元結を使う日を夢みての作と解する。

▼ 川島『一茶集』に、「春雨にぬれている塵あくたの上に散ばっている赤い元結屑。印象的である。さ細なものを見逃さぬ生活派俳人一茶の目」。中島『小林一茶集』に、「黒ずんだ掃溜の塵芥の中で、それだけがひとときわ目立ってうらさびれた感じである。そこへしとと春の雨が降っている。掃溜と赤元結の対照に小味を見せた写生句」。

餅買に箱提灯や春の雨

㊤ 我春集・九日集

注 「箱提灯」、上下に丸く平たい蓋があつて、折りたたむと蓋の中に納まる手さげ提灯。

解 春雨の中、箱提灯をさげて餅を買いに出る、の意。

春雨に大欠する美人かな

㊤ 七番日記(文化8・1)・我春集・稿本発句題叢・近世発句類題集・発句鈔追加・希杖本句集
 ▽ 我春集、中七「大欠ビスル」。

解 春雨が続くつれづれに、大あくびをする美人。不調和だが、確かにある現実である。我春集の序文で、観念的・通俗的俳諧を批判、生活実感を重んじる新しい俳諧を主張した一茶は、積極的にこのような題材を求めた。

▼ 栗山『小林一茶』に、「ことさらにこのような不調和な対置がなされているのは、大きなもの、優雅なもの、美しいもの―総じて他に優越すると認められるものの否定、その価値喪失によって生ずる違和感によって滑稽味をもたらそうとしているように思われる。(中略)けれども、極端な落差による対置の可笑味は、一茶がみずから興がるほどに魅力のあるものではなく、その底意を知ってうなずく程度のものである」。金子『一茶句集』に、「ハでっけえ欠伸をしている。美人もかたなしだなあ。V―春雨に降りこめられて退屈しているのだから。外にでてきて(あるいは二階の障子でも開けてか)、誰も見てはおるまいとばかりに、大きな欠伸をしたのである。一茶のアニミズムは、性悪な生きもの、気どったり威張ったりする生きものには敏感に嫌悪の反応を示し、その句は皮肉っぽくハイローニッシュVになる」。

袖たけの垣の嬉しやはるの雨

㊤ 板本発句題叢(文政3)

解 「垣」は「生垣」であろう。人の袖丈ほどほどの高さの生け垣が、新しい芽をふいている。この春雨に会う日をどんなにか待ち望んでいたことだろう、の意。

春雨や喰れ残りの鴨が啼

㊤ 七番日記(文化10・1)・志多良・句稿消息

▽ 浅黄空・自筆句集、座五「鴨の声」。

解 春雨の向うから鴨の声が聞こえてくる。お前たちも「喰れ残」って春を迎えることができたのか、の意。享和句帳に、

「殺されにことしも来たよ小田の雁」(3・7)。

▼川島『新釈』に、「しとく」と降る春雨に濡れて、溝堀などの鴨が佗しげに鳴連れて居る。その鴨は昨日よりも減った。(中略)そのことが、静かな春雨と和して、作者の心に淡い哀愁を呼んで居る。哀愁を感じながらも、その哀愁を一つ踏返して、『喰はれ残り』といふやうな放膽な語を持つて来て、酒脱諧謔を標榜する本来の面目を失つて居ないところに一茶の特色がある。黒沢『研究』に、「喰はれ残り」と素破抜いたのはやはり一茶の特色ある表現法で却て人間味のまさった句となつたのであります。春雨の降る景色に鴨の啼くの上品さもこの一句で、心地よく人間の色彩に塗りつぶされて了つてゐます。考へて観れば一茶こそ実に喰はれ残りの人間でありました、不遇に生れた彼が実に人間として生き得られたのは不思議な位であります。額原『俳諧名作集』に、「しめやかに春雨が降る日、物うげに啼く鴨の声がする。この情景はそれだけで一の句となり得る。普通の俳人ならば、勿論さうした情景のまゝ句案を定めるにちがひない。しかし一茶は、それをやはり皮肉な眼で眺めずにはをれなかつた。『おや鴨が啼くな。あれは冬の間にくまなく命を助つた、いはゞ食はれ残りの鴨ぢやないか』。一茶はさう呟いて軽く皮肉な笑を浮べるのであつた。(中略)何でも真直に物を言はないのだ。それは彼の悲しい性格でもあつたが、又彼の句に強い個性を与へた所以でもあつた。栗山『古典名句評釈』(俳句講座)に、「降り暮れた春雨の網目を通して、鴨の鳴き声がわびしく伝わってくる。いかにも濡れたやうな哀音である。『海くれて鴨の声ほのかに白し』という芭蕉の句のひそみにならえば、春雨―鴨が鳴くという取り合わせは、感性の世界としては十分に成り立つ。それを選ばないで、一茶は独得のひねり方をする。この情景としては、無心に聞いてもわびしさを誘う鴨の声であろう。それを『喰はれ残りの鴨』と解するところに、彼の対象把握の特異なポーズがある。冬の間、食料として鴨はせつせと捕獲される。今頃になってまだ鳴いているのは、捕獲をまぬかれた運のいい鴨だなあとという同情が、この句を芭蕉の句と異質のものにしている」。丸山『小林一茶』に、「この句は、冬の猟期に運よく捕獲を免れた生き残りの鴨である。人里離れた山中の池・沼などに棲み、田畑に餌を求めに来るのは薄暮から夜にかけてである。この句も夕景と見た方が、哀愁が深い。(中略)いかにも濡れた哀音である。これだけでも十分一句として成り立つ情景であるが、それを『喰はれ残りの』と独特のひねり方をするところに、一茶の対象把握の特異さがある」。宮本『大観』に、「春雨のしとくと降る日、わびしげに鳴く鴨の声がする。今ごろになって、仲間もなくまた鳴いているのは、冬の間捕獲を免れて生き残った鴨だなあと、哀れに感じている句だが、それを『食はれ残り』などと表現するところに、人間臭く対象をとらえる一茶の特色が見られる」。

春甫新宅賀

安堵して鼠も寝るよはるの雨

㊤ 文政版発句集

注 「春甫」、長沼の人。村松氏。葦庵、鷗巢、放庵と号し画俳を兼ねた。一茶門。今日、一茶の肖像として伝えられるものはすべて彼の筆。安政五年没。八十七歳。

解 新築成った家は春雨につつまれて静かである。家の鼠も、それぞれ所を得て落ちついた様子である、の意。

婚礼

春雨や相に相生の松の声

㊤ 浅黄空・自筆句集・文政版発句集

▽ 浅黄空、前書「新婚賀」。自筆句集、前書なし。希杖本句集、前書なし。座五「松の色」。

解 庭に植えてある相生の松に降りかかる春雨の音も落ちついて、平穏な生涯を約束している。

春雨や鼠のなめる角田川

㊤ 句稿消息(文化10)・文政版発句集

▽ 七番日記(文化10・2)・上五「春風や」。希杖本句集、上五「長閑さや」。

解 春雨の墨田堤から一匹のどぶ鼠。墨田川の水で咽をうるおそうとするのか、の意。芭蕉の「水苦く偃鼠が咽をうるほせり」(虚栗)が念頭にあった。芭蕉の句は、『莊子』逍遙遊篇の「鷦鷯巢_ニ於深林_ニ不_レ過_キ一枝_ニ、偃鼠飲_レ河_ニ不_レ過_キ満腹_ニ」をふまえたもの。

▼ 句稿消息、成美の評は「奇々妙々」。川島『新釈』に、「鼠が隅田川を嘗めると云つたのは諧謔に富む作者の奇智で、物の

大小を取合せて滑稽味、或ひは或る気分を現すことは作者の好んで用ゐた手段である。(中略)この句も初め『春風や鼠のなめる隅田川』とあつたのを、後に『春雨や』と攻めたのである。斯う並べて見るとやはり作為の跡が鼻について嫌になつて来る」。川島『一茶集』に、「鼠のなめる―河岸の家から流れ出す残菜をあさる鼠であろう。意外な物のとり合せて滑稽感を産み出す一茶の慣用手段の好例である」。加藤『秀句』に、「これは後に『春雨や』『長閑さや』など季語がとりかえられて伝えられているが、いずれにせよ、例の莊子の『偃鼠飲河不_レ過_レ滿_レ腹』が契機になつた発想で、格段に異なるものを對比させた意外感に狙いをおいた、一種の談林的手法の系統に属するもの。発想の契機とした芭蕉の、茅舎買水/氷苦く偃鼠が咽をうるほせり(芭蕉)が、ひびいているものと思われる」。金子『小林一茶』に、「春風の隅田川、鼠が一匹ちよろちよろでてきて、川の水を舐めはじめた。びちゃびちゃ びちゃびちゃ その音が、しだいにひろがる眩きのように。―文化十年。江戸のときをおもつての作だろうが、暗い句だ。隅田川の流れは暗流で、鼠に怨念を感じる。舐める音が鋭いな。いや、すごい感覚だとおもう。能の『隅田川』が根にあるのかな。もしそうとすると、これから一茶は次ぎ次ぎに子を得ては失うのだが、その予感かな」。

穴蔵の中でもいふ春の雨

㊤ 七番日記(文化10・3)・志多良・句稿消息・浅黄空・文政版発句集
▽ 浅黄空、上五「穴蔵」の」。

▽ 解 穴蔵の中で、ものを言っているような、降るでもない、あがるでもない、はっきりとしない雨空だよ、の意。
▽ 川島『一茶集』に、「ものうい、しかし、どこやらふっくりした春雨の情趣を気分的にとらえている」。

負弓の藪にかゝりてはるの雨

㊤ 七番日記(文化11・春)・句稿消息・文政版発句集
▽ 七番日記、前書「飼犬に手を喰はるゝ」。上五「負弓が」。

注 「弓始め」の帰途であろう。「弓始め」は、鎌倉開幕当時の文治五年(一一九八)正月三日にはじまる。室町期には「的开始」と称して、十七日に行なわれた。江戸時代、『甲陽軍鑑』『滑稽雑談』『年浪草』などでは七日とする。「負弓」は、腕

のわるい弓の引き手の意であろう。一茶には「負菊をひとり見直す夕べかな」(文政句帳)もある。
解 「弓始め」に、思うように弓を引けなかった弓引きが、帰途、藪にさしかかったところで、春雨に見舞われ、手にした弓のために、すっかり衣服を濡らしてしまった、の意。

▽ 句稿消息、成美の評は「古人の風あり、甘賞にたへず候」。

鳩いけんして曰

梟よつらくせ直せはるの雨

㊤ 七番日記(文化12・1)・斗圍あて書簡(文化12・2・23付)・春耕筆録「歌仙」(一茶・成布・春耕三吟Ⅱ未満、文化12・

4)・句稿消息・文政版発句集・真蹟。

▽ 句稿消息、前書なし。浅黄空・自筆句集、前書なし。上五「梟も」。

解 鳩が意見して言う、「春雨の季節、世はすべて和いでいる。梟よ、いつまでもすねていないで、仲間になろうよ」、の意。
自戒の意も含めてある。

▼ 句稿消息、成美の評は「和暖の景色おのづからひびきてよし」。川島『新釈』に、「前書がなくとも面白いには面白いが、何と云つてもこの句のうま味は鳩と梟の対照にある。鳩と梟と、各々の姿なり性格なりを巧みに捉へてあるところに、おのづからなる可笑味がある」。加藤『秀句』に、「これは木菟の句(注、「みみづくの面魂よ春の雨」)を裏がえしにした発想だといえる。『春の雨』はやわからかでは何かもやさしくなる。その春の雨の中で、梟だけが頑として世を拗ねたような、反抗的な面癪をあらためようとしな。自分でも辛いのではないか、もてあましているのではないか、一茶はふとそんな風なことを考えたに違いない。『鳩、意見して曰く』というのは、一茶の心の中のもう一つの声なのであろう。(中略)梟も、鳩も、一茶の分身なのである。そして少なくともこの句の場合は、梟的な自分をあわれがりつつ、いとおしんでいるようである」。金子『一茶句集』に、「八ふくろうさんよ、あなたは面癪(つらくせ、とも。人相、顔つき)がよくないですよ。今年あたりはそれを直す工夫をどうですか。▽外は新春の雨。(中略)しかし、その前年に二十八歳のきくと結婚していることをおもいだすと、この元旦吟が新婚の正月の句であることに気付く。そうすると、「鳩」とはきくのことだな、

とさらに気付く。(中略)この句、右のように本来にきくがそう言ったとも取れる。しかしそれよりも一茶自戒の句と取るほうが一と味加わる印象がある。一茶は日頃、きくに済まないとおもうことが多かったのだ。

水江春色

すつぽんも時や作らんはるの月

㊤ 七番日記(文化15・3)・李園あて書簡(文政2・2・15付)・おらが春・浅黄空・文政版発句集
 ▽ 七番日記、前書なし。浅黄空、前書「大沼春色」。

注 亀に発声の機能はないが、夫木抄の「河越の遠の田中の夕闇に何ぞと聞けば亀の鳴くなる」(為家)以来、亀も鳴くと考え、「亀鳴く」を春季とする。

解 鈍重なすつぽんも、鶏が時を告げるように鳴き声をたてるのではないか。この美しい春の月に出会っては、の意。芭蕉の「此梅に牛も初音と鳴つべし」(江戸両吟集)が、念頭にあったと見てよからう。ただし、俗諺に「すつぽんが時を作るよな話」もある。

▼ 川島『新釈』に、「馬琴の俳諧歳時記には、夫木集『川越のをちの田中の夕闇に何ぞと聞けば亀のなくなり 為家』と、古歌を引用してある。(中略)おぼろ月に対して亀鳴くといふ季題は、何とはなしにそれらしい、暢やかな感じの伴ふものである。実際にはないものを第六感に感じていゝ気になつて居るところは俳人、寧ろ日本人特有のお目出度さかも知れないが。それで、この句は亀の同種族で、然も亀とは反対に慥悍なすつぽんを捉へて来て『時や作らん』と大きく出たところは、たしかに奇想である。同時に、油を流したやうな水辺にあつて、まんまるい春月に対した作者の胸の拡がるやうな気分も説明なしに感じて貰へる筈である」。勝峰『名句評釈』に、「おぼろ／＼の春月が水に一帶に穏な光を投げてゐる。すべてが軟かに和みきつた晩である。あゝこんな晩に、すつぽんが時を作りさうだと、奇抜な、しかも自然な想像を廻らしたのである。(中略)無論亀が鳴く筈もないが、昔からさう感得されたものか俳人は之を季題にしてゐるのだ。そこで同族のすつぽんを持つて来、そして時を作ると鶏のならばしを転用したのである」。勝峰『評釈おらが春』に、「春はあの幽邃な水を湛へる沼の中にもはひ寄つて、天心の月もおぼろに、寂光の暈をその上にひろげてゐる。この景、この時、鶏犬の声は聞える筈のな

い無人の境にあつて、確に鳴くとかいふあの亀が、或はひよつと時刻を知らせる『とき』をつくらぬでもあるまい。すつぽんの告げる『とき』、もしそれが聞えたらと、伝奇的な淡い期待で、ちつと佇んで足のしびれも忘れる一ト時である」。川島『おらが春新解』に、「亀よりも精悍なすつぽんを想像裡に捕えて、『時や作らん』と、人の意表に出たところは、高度の俳諧化、感覚の非現実的飛躍とも言うべきであらうか。ややうるみを帯びている春月の下に、おっとりとしずまっている油のような水面、その余りの静けさに反撥してみたくなるような気分の高揚が、調子はずれた表現の中に生かされている。この句が単なるおもしろがりや思いつきに墮さなかつたことは、作者と自然との間に気分の醇化が行われていたためである」。中島『小林一茶集』に、「のどかな水辺の春景色。鶏ならぬすつぽんまでが、春の月をめめて、時を作るかと思われる」。加藤『秀句』に、「水を漫々と湛えた水辺は春色が深くなって、春の月が夢幻の境をつくりだすような夜、これに誘われてすつぽんも鶏のように時をつくるのではなからうかというのである。(中略)もちろんすつぽんも鳴きはしないが、ありそうもないことの譬えに、『すつぽんが時を作る』という諺がある。それを使ってこの夢幻感を生かしたものだと思う」。宮本『大観』に、「空におぼろの月がかかり、沼の水面はとろと静まり返って動かない。この思わず夢幻の境にさそい込まれるような夜、今にもすつぽんが鶏のように時をつくり出しそうなけはいを感ずるといのである。(中略)世にあるはずがないことの譬えに『すつぽんが時を作る』という諺があるほどである。それをあえてこう詠んだところに、この句はかえって、春の夜の浪漫的な夢幻性が出ているように感じられる」。

ついでその二文渡しや春の月

㊤ 七番日記(文化9・2)・株番・文政版発句集

解 春雨の中、二文の渡舟が行く。春雨にけむる大河の渡し舟ではなく、これは目と鼻の先を往来する小さな渡しである。古くから、句の題材に迎えられなかつた景物、それを積極的に採ろうとするのである。

待々し日永となれど田舎かな

㊦ 句稿消息(文化10)・文政版発句集

▽ 七番日記(文化13・1)、中七「日永となれば」。

解 冬の間、待ちに待った日永にはなったが、それはそれでまた退屈なことだ。この田舎では、の意。
▼ 句稿消息、成美の評は「実境、さも有べく甘心」。

春風やとある垣根の赤草履

㊤ 八番日記(文政3・2)

解 春風の季節、子供が外で遊ぶところになった。ふと見ると、生垣の下に赤い鼻緒の草履が片方あるのが目に入った。成立の時期を考えれば、その赤い鼻緒に、夭折した愛娘さとの思いが込められていることを否定できない。

宿引に女も出たりはるの風

㊤ 八番日記(文政3・2)

解 善光寺門前あたりの景であろうか。春風の季節、人の動きも盛んになって、客引きに女性までが出て、にぎわっているよ、の意。客を引くやわらかな女の声と、春の風に、雪国の春の気分がうかがえる。

老ぬれば日の永いにも涙かな

㊤ 八番日記(文政3・2)・浅黄空

▽ 自筆句集、中七「日」の「永いのも」。七番日記(文化13・2)、上五「老の身は」。文政句帳(文政5・2)、上五「としよれば」。

解 歳をとれば、他もおっくうになって、長い一日をもてあます、の意。

闇がりの牛を曳出す日永かな

㊤ 八番日記(文政3・3)

注 「牛を曳出す」、雪国の農家では家屋の中に牛小屋を設けてあった。
 解 「闇(くらがり)から牛を引き出す」というたとえがあるが、春日がさして、闇の牛屋から牛が引き出されている、の意。牛を外へ出して、下に敷く藁や干草などを取り替えるのである。

春風や牛にひかれて善光寺

㊤ 七番日記(文化8・2)・文政三十八年句日記写・文政版発句集・希杖本句集

▽ 句帳写、前書「二月十五日より開帳」。

注 「牛にひかれて善光寺」、牛にひかれて善光寺参り、をふまえる。「牛にひかれて善光寺参り」は、強欲で不信心な老婆が、晒しておいた布を頭の牛が角にかけて走ったのを追うと、牛は善光寺に駆け込んだ。老母はたちまち如来の威光に触れて教化された、という小諸の布引観音に連なる善光寺伝説による。

解 善光寺は御開帳でにぎわっている。中には「牛に引かれて」のたぐいも多いことだろう、の意。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「句意は別に解くまでも無からう。諺をそのまま俳諧化したもので、特に誰が斯うしたといふのではない。無論一茶が人に唆かされて仕様ことなしに善光寺詣をしたといふのではない。初句の『春風や』が動かぬところで、他の夏秋冬のどれも適合しないであらう」。川島『一茶集』に、「春先、案内人の小旗を先立てて、ぞろぞろと善光寺まわりする講社の人たちの姿など、思い浮べられる」。

はるの風おまんが布の形にふく

㊤ 志多良(文化10)・句稿消息・浅黄空・文政版発句集

▽ 志多良・句稿消息・浅黄空、前書「高い山から谷そこみれば」。

注 「おまんが布」、三階節の「高い山から谷見れば、おまん、おまんが可愛いや染分禪で布さらす」をふまえる。

解 春風の季節。あちこちで洗濯物がひるがえっている。「おまん可愛や布さらす」と謡われる景物そのものだ、の意。前出句と併せて、機知的な言語遊戯の域を出ない。「おまん」は、「あなた」、の意。

▼ 川島『新釈』に、「句意は同じ一茶の『晒布霞の足しに聳えけり』と略々同景で、晒布を中心として扱ってあることも同

じだが、特殊な小唄から脱化させて、然も春風が布のなりに吹くといふ子供らしい言廻しは、作者がよい心持ちで詩的感興に酔はされて居たことを思はせる。さほどよい句とは思はないが、春風に吹撓められ／＼する晒布の遠景は見えて居る。兎に角、小唄を巧に活して長閑な春景色を叙してある点は、二重の成功と云ふべきであらう。川島『一茶の種々相』に、「寛文頃の唄に『源五兵衛どこへ行くさつまの山へ、高い山から谷底見れば、おまんかあいや布さらす』と、この唄は近松作の『薩摩歌』の中にも取入れられてある。勝峰『名句評釈』に、「春風が吹いて布が翻る。布は風の吹く方向に靡き翻る。それをあべこべに、布のなりに春風が吹くと印象的に詠んだもので、芭蕉の『嵐山藪の茂りや風の筋』といふのも同工曲である」。

狗が鼠とるなりはるの風

㊤ 八番日記(文政3・10)・文政版発句集

▽ 八番日記(文政4・2)、座五「春の雨」。

解 汗ばむようなばか陽気。こんな陽気では、狗までが狂って鼠を捕る。まさかそんなことはあるまい、の意。

不忍池に亀どもの菓子ねだるありさまを見るに、此節娑婆に万年の留^(逗留)もならん

永の日を喰ふや喰ずや池の亀

㊤ 七番日記(文化7・2)・株番・八番日記(文政3・3)・浅黄空・自筆句集・発句鈔追加

▽ 七番日記・自筆句集、前書なし。株番・浅黄空、前書「不忍池」。八番日記、前書「しのぶが池に亀どもの菓子ねだる有

様見るに、此苦「の」娑婆に万年の逗留も退屈ならん。さら也」(梅塵本「百年の留^(逗留)も退屈なるらん」)。「発句鈔追加、前

書「しのぶの池に亀どもの菓子ねだる有さまをみるにかゝる苦の娑婆に万年のよはひをたもつも退屈ならむ」。

注 「不忍の池」、江戸上野のしのぶの池。

解 万年の齢に恵まれるという亀。この長閑な春にあいながら、この亀たちも「食うや食わず」の日を送っている。これで、万年の齢を延ぶるといふのは、なかなかのことだ、の意。眼前の亀に自身の境涯を投影、ほっとため息をつくのである。

▼ 川島『新解』に、「一茶の境遇を思ふと、この句も一寸した諧謔として見過して了へない気がする。何につけても先づ喰ふことに思ひ至らねばならなかつたほど、江戸時代の彼の生活には安定といふものがなかつたのであつた。一茶時代の不忍池畔は、茶店・揚弓場、講釈場等軒を並べて繁昌した市民行楽の地であつた。その池の端の仲町あたりの粋な家並を背景にして、見窄しく瘦せた男がふらりと立つて、皮肉な微笑を浮かべながら汀の亀の子に見入つて居たであらう姿が想像される。だが、長閑な江戸の春だ」。加藤『秀句』に、「一茶はのんびり不忍池のほとりで亀のうごきを見ているのだ。あの不器用でそのそした亀は、どうして餌にありつくのだろう。鯉はどしどし競って餌をのみこむというのに、亀はまったく『喰ふやぐはず』ではないか。ここで一茶の生活の『喰ふやくはず』が反映し、亀のうごきから自分の生活に戻ってくるのである。つまり、亀はもう一人の一茶なのであり、その分身なのだ。(中略)一茶の擬人法の性格はそんな性格のものである。意識して構成してゆくよりは、一挙に反射してゆくのだ」。

永の日や牛の涎の一里ほど

㊤ 八番日記(文政3・2)

▽ 中七「牛の涎が」の誤りか。八番日記、中七「牛の涎が」。

解 薪炭や木材などを積んだ車を引く牛であろう。糸を引くように、長い長い牛の涎が不連続線状に続いている、の意。実景であろう。

おらが世やそこらの草も餅になる

㊤ 七番日記(文化12・2)・浅黄空・自筆句集・文政版発句集・希杖本句集

▽ 希杖本句集、前書「月をめで花にかなしむは雲の上人の事にして」。

解 私が生活するこの土地では、野辺や道端の草さえ餅になる、の意。長い冬があけて、明るい春の日ざしと、草木の恵み、雪国の春はそこに住む者に蘇生の感を与える。七番日記(11・1)に、「餅になる草が青むぞくよ」。

▼ 川島『新釈』に、「人事に即した、執拗な狭量な詩人一茶も、一面楽天的な自然人であつた。然し、自然を讚美するにしても、飽までも自己を中心とした御自慢であるところに、この人の特色がある。長い陰気な冬を経て、若芽若草の萌出る春

を待ち得た農民の心の歓びが脈打つて居る。特に一茶のやうに窮迫した都市生活を送つて来た者には、自然の恵みも自然の歓びも一段と深く印せられた筈である。黒沢『研究』に、「おらが世―この言葉には一茶と自然との融和が含まれてゐると思ひます。わが春は実にそこらに生えてゐる草でさへも餅になるといふのです。この朴訥な情味の表現は一茶独特のものであります」。荻原『一茶名句』に、「蓬は土手や庭の隅にも、春になればぞくぞく自生する。普通に、食用とするものは、手を労して作らなければならないのだが、そこらに自然に生えている草が手あたりしだいに摘みとって食用になるとは、なんとありがたいことではないか。これこそ好い世の中というべきものだ。『おらが世』といつてもいいではないか、という意味」。中島『小林一茶集』に、「故郷ではそこらの庭先に生える蓬も草餅のしろになる、有難いことだ、と衣食のわずらいのない現在の境遇に感謝しているのである。丸山『小林一茶』に、「長い放浪の果てに行き着いた安住の故郷の地。その故郷では、春ともなれば、そこらの庭先に生え出た蓬も、かぐわしい餅になる。何といい世の中だろうというのである。(中略)『おらが世や』という開け放しの表現にも、満ち足りた安堵感が感じられる。(中略)もはや伝統的美意識も季節感も全て無視されて、そこにはただ、現実的な根強い生活の意識があるだけである」。栗山『小林一茶』に、「春が訪れ、若草の萌え出る頃ともなれば、深い雪に埋もれた北信濃の柏原でも、なつかしい土の香を嗅ぐようになる。雪国の人々の春を待ちわびる心には格別なものがある。だから、若草を摘んで草餅をこしらえるという年々のしきたりにも、自然の巧まない恩恵にあらずかるといふ深い感謝と喜びの情がこめられていよう。そういう心情を強く押し出そうとすれば、前書(注、希杖本句集)のような反撥や皮肉となるのも、それほど不自然なことではない」。宮本『大観』に、「春ともなればそこら中に蓬すなわち餅草が青々と萌え出て、摘んで草餅にすることができるとある。なんとありがたい世の中ではないか。それこそ現在の境遇を『おらが世や』と謳歌し得る満足感に作者はひたっているのである。『おら』という俗語も一茶にふさわしい素朴な野趣を感じさせる」。

我宿は何にもないぞ巢立鳥

④ 七番日記(文化10・1)・志多良・句稿消息・文政版発句集

解 巢立ったばかりの小鳥が一羽、庭の小枝にやって来た。巢立鳥よ、ここへ来て、お前に与えられるものは何もないぞ、の意。

好々や此年よりをよぶこどり

▼ 句稿消息、成美の評は「無味の味、感心」。

㊤ 文政句帳(文政7・3)・自筆句集・文政版発句集

解 「蓼食う虫もすぎずき」というが、これはまあ、かつこうがこんな年寄に声を掛けているよ、の意。

塊もこゝろおおかよ巢立鳥

㊤ 文化句帳(文化2・2)・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

▽ 文化句帳(2・2)、上五「菜鼻にも」(別案)。七番日記(「寛政元年ヨリ文化六年迄」)、「葉の〔音〕にも」、浅黄空・自筆句集、上五「菜の葉にも」。

注 「塊も」、「塊にも」の意であろう。

解 巢立ったばかりの小鳥は、畑の土塊にも心づかいをするように、その上を跳びあがっている、の意。

手のひらにかざつて見るや市のひな

㊤ 浅黄空・文政版発句集

▽ 文政句帳(文政7・3)、座五「雛の市」。自筆句集、中七以下、「かざりてみるや布の雛」。

解 雛の市に来て、あまりにかわいらしいので、ちょっと掌に載せて見る、の意。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「川柳に『さい槌はぶつ真似をして年をつける』とかいつた様なのが有つたと思ふ。物を買ふ時に、反物なら肩前に当てゝ見たり、眼鏡ならはめてみる。茲では雛だ。手の上に載せて、一寸遠くへやつて、首を傾けたりして、ためつながめつするのが普通である。ちやうど川柳などの取材であるが、俳諧にも無論なり得る図である。茲に一茶が『据ゑて』と言はずに『飾つて』としたのは好表現の選語として賛したい」。

上巳之部

浦風にお色の黒いひいな(ひ)かな

㊤ 梅塵本八番日記(文政2)

▽ 梅塵本、前書なし。風間本(文政2・2)、前書なし。中七「御色の馬い」。「馬い」は「黒い」の誤記であろう。

注 「上巳」、五節句の一つ。三月三日、桃の節句をいう。

解 浜風に当たったせいだろうか、これはまあ、何と色の黒いお雛さまであることよ、の意。

煤け雛しかも上座をめされけり

㊤ 八番日記(文政2・2)

▽ 風間本、座五「ゆ(め)されけり」。梅塵本、座五「召れけり」。八番日記(3・3)、中七以下「いつち上座におはしけり」。

注 「上座を」、雛壇に飾られた揃いの雛人形ではなく、一体だけの雛人形。祖母の雛、母の雛、姉の雛と古い順に並べる。したがって、上座にある雛は煤けてしまっている。

解 顔も衣装もすっかり煤けてしまった雛人形、それが上座をしめている、の意。

花咲ぬかた山かげに雛まつり

㊤ 八番日記(文政2・2)・発句鈔追加

▽ 上五「花咲きぬ」ではなく「花咲かぬ」と読む。八番日記に「花さかぬ」。中七「かた山かげも」の誤りであろう。風間

本、梅塵本とも「片山かげも」。発句鈔追加も「片山かげも」。

注 「花」、桜はもちろん、「桃」にも限定しない。

解 春の花にも恵まれることのない、こんな山陰にも雛祭りの季節がやって来た、の意。

盃よまづ流るゝな三日の月

- ㊤ 七番日記（文化11・1）・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集
- ▽ 七番日記・発句鈔追加・希杖本句集、前書「曲水」。「曲水」は「曲水の宴」の略。「曲水の宴」は、古代から朝廷における年中行事の一つ。三月上旬、後に三日（雛の節句）に、朝臣たちが曲水（庭園内を流れる水）に臨んで、流れてくる盃が自分の前を流れ過ぎないように詩歌を詠み、盃を拾いあげてその酒を飲み、次へ流すのである。
- 解 宮廷行事に思いを寄せた句。曲水の宴にあっては、盃が急いで流れて来ないように思ったことだろう、の意。

筆添ておもふ盃流しけり

- ㊤ 八番日記（文政3・3）
- 注 「盃流しけり」、前出句同様「曲水の宴」に思い寄せた。
- 解 返しは、あなたの御意のままにと、盃に筆を添へて下流へ流した、というのであろう。

川下や果は闌とりの小盃

- ㊤ 八番日記（文政3・3）
- ▽ 風間本、中七「早は闌^(果)とりの」。
- 解 曲水の宴。下手にひかえる者は、闌（くじ）を引いて、吉凶をうらなうような気持ちで、盃が自分の前に来るのを待つ、の意。曲水の宴に臨んだ朝臣の気持ち、さもあらんと推量したのである。

人まねに鳩も雀も汐干かな

- ㊤ 稿本発句題叢（文政3以前）・希杖本句集
- ▽ 浅黄空・自筆句集、上五「人並に」。

注 「鳩も雀も」、「猫も杓子も」のたぐい。「汐干」、汐干狩り、の略。
解 人真似をして、猫も杓子も汐干狩りに出ている、の意。

如病得医

花を折拍子にとれししやくり哉

㊤ 七番日記(文化15・2)・だん袋・浅黄空・自筆句集・文政版発句集・希杖本句集

▽ 七番日記、「如病者医」と前書して、「かすむ野にいざや命のせんたくに」「温石のさめぬうち也わかなくも」
目の正月ぞ夜の花」の三句とともに、この句を収める。だん袋、前書「薬王品如病得医」。浅黄空、前書「病如病得医」。希杖
本句集、前書「如病者医」。

注 「如病者医」、法華経の薬王本事品による。

解 花を折ろうとした、その瞬間にくしゃみが止った。まさに、「病者医ヲ得タルが如シ」と言うべきであろう、の意。

花のかげ南無さん火打なかりけり

㊤ 浅黄空・自筆句集・文政版発句集

注 「南無さん」、「南無三宝」の略。「南無三宝」は、「仏」「法」「僧」の三宝に帰依すること。転じて、事の成功を祈ると
き、また事に驚いたときや失敗したときにも言う。大変だ。しまった。

解 満開の桜の下で、ちょっと一服と思つて、袂をさぐるが火打石がない。これはしまった、の意。

▼ 黒沢『研究』に、「花の下に一服する一茶の姿があり／＼と見える句であります。南無三といふやうな掛け声はいかにも
煙草好きなの云ひさうな言葉です。彼れ一茶はやはり普通の人間であつたのでせう、煙草の趣味もあつたのです。彼はこ
の凡夫地から悩み徹して行つたのであります。特殊な人間では無い、完成死するやうな人間では決して無かつたのです」。

かう活て居るもふしぎぞ花の陰

④ 七番日記(文化7・2)・文政版発句集

解 咲き盛る花の下に腰をおろし、数奇な運命に棹さして生きてきた過去と、難行する父の遺産相続問題の接点に自己の存在を見つめての嘆声である。極限に近い疲労の堆積の中からの嘆声である。「古郷はよるもさはるも茨の花 まま子一茶」の成立はこの年の五月。

▼ 川島『新釈』に、「『あゝ今年も生きて居て斯うして花を見る事が出来た。』といふやうな安ッぽい感傷的な気分とも違ふ。この句はもつと深い、人間性の深虚に触れて居る。(中略)作者は偶々爛漫たる花明りの下にイんで、ふと現実に眼醒めて、自己の存在の不思議、今日まで生続けて来た偶然の運命の不思議さにも胸を打たれて、更に夢を重ねて行く気持ちで自分自身を見廻して居る。『不思議ぞ』といふ突然な表現も、巧まずして人の心に迫つて来る。瞑想の世界に交流する作者の魂の深さにしみくるとさせられる句だ。私は、一茶を皮肉と諧謔の権化のやうに解して居る一部の人々の前に、この句を薦めたいと思ふ。黒沢『研究』に、「一茶の俳句は彼の偽はらざる独り言です、これは再三申上げた通りです。荒削りのまゝ、そこには一茶の素質が、あらはに見えるのです」。川島『一茶集』に、「斯う生きて―みずから漂泊三十六年と書いている一茶が、長い生活のヒダを越えて、ゆくりなくも、咲き盛る花の陰にたたずんでいる自分自身の生命のふしぎさに打たれる感じ」。中島『小林一茶集』に、「漂泊の月日をふりかえり、家なしではあるが、どうやら命をつないで、またも花咲く春に逢い、こうして無事で生きているのも不思議な気がする、という感慨をもらしているのである」。丸山『小林一茶』に、「長い漂泊の歳月をふり返って、今日まで命をつないで生きてきた不思議さに、深い感慨を催した句である。ああ、今年もどうやら生きていて、こうして花咲く春にも逢えたというような、安易な感傷的気分ではない。この句はもっと深い、心の深处に触れている。(中略)安堵感というよりも、深い驚きであり、胸奥から発した嘆声であろう。『不思議ぞ』という強く迫った表現にも、それが十分に感じられる」。

三月十七日保科詣

花ちるやとある木陰も小開帳

④ おらが春・文政版発句集

▽ 七番日記(文化15・3)、座五「開帳仏」。自筆句集、上五「花さくや」。座五「開帳仏」。

注 「三月十七日保科詣」、信州保科村(現長野市の内)にある阿弥陀山清水寺観音。坂上田村曆の創建といい、三月十七日は、その縁日。「小開帳」、保科の清水寺とは関係のない、拝観料集めをあてこんだ出開帳。一茶に、「花ちる〔や〕一開帳の集め銭」(七番日記、文化12・11)、「さく花をあてに持出す仏かな」(八番日記、文政3・2)がある。

解 保科観音の縁日。境内の桜の花びらが風に舞っている。その木陰で、どこかの秘仏を開帳している、の意。桜の春、暖かい陽気にさそわれたように、近郷の人々が押し寄せて、清水観音の境内は活気があふれている。信濃の春はこれからだ。

▼ 勝峰『評釈おらが春』に、「揺曳する花の雲、京都の音羽山に擬らへる保科の阿弥陀山清水寺は、甍を高く雲に聳えさせて、秘仏観世音の開帳に吸はれる人出で賑ふ。群集をあて込みの出開帳が、参詣道のちよつとした木立の蔭にも見える。素朴な信仰心は縁起の口上に誘はれて、何文かを寄進しては御利生を祈るのであつた。厨子の扉へ、そして覗いて拝む顔々へ、葩がひらく天から降るやうに散つてかざやかしい。花ちるやは不用意に詠んだのでない。花への関心は開帳仏の方に奪はれるが故に、散るやが効果的なのである」。川島『おらが春新解』に、「折しも弥生半ば過ぎで、盛り過ぎた花が群集の上にはひらひらと散りかかっている。ふと見ると、参道のちよつとした木立のかげでも、どこやらの秘仏を開帳して人を集めている。小開帳の語感から言っても、これは下総成田の不動とか、江戸の何々というような名刹のそれではなく、言わば観音の開帳に便乗して、さい銭あつめのために持出してきた開帳である。『木陰も小開帳』の裏に、保科観音の開帳そのものの賑々しさが暗示されている。長い冬から解放された山国の春らしい、ゆたかな気分たたえられている句である」。伊藤『小林一茶集』に、「人の寄る場所に秘仏を開帳して、拝観料を取る事が当時は流行した。一茶はさうしたものに人一倍興味を持つて居た」。宮本『大観』に、「保科観音は靈験あらたかな観音として信仰を集め、ことに春の縁日は賑った。参詣人の人出で賑わう境内のちよつとした木立のかげでも、どこそこの秘仏だと称して参詣の群集をあてこんで、小規模な開帳をして賽銭を集めている。折から覗き込んで拝む人々の顔にも花がひらひらと散りかかるといふ光景である」。

人撰(選)して一人りなり花の陰

㊤ 文政句帳(文政8・1)・文政版発句集

解 あれともいやだ、これともいやだと人選びして、結果はたった一人で花見をすることになってしまった、の意。自身のこ

ととも読めるが、花陰にぼつねんと一人腰をおろしている、花見の客と見た方がよからう。
おとろへや花を折にも口まげる

㊤ 七番日記(文化14・10)・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

解 すっかり衰へてしまい、花の小枝を折るのにも、口をまげるほどになってしまった、の意。

花の木に鶏寝るや浅草寺

㊤ 文政句帳(文政8・9)・文政版発句集

解 花に賑う浅草の浅草寺境内、その賑いに何のかかわりもないように、鶏が一羽桜の枝で静かに眼をつむっている。周囲の動きに惑わされ、一向に安定しない自身への戒めである。もちろん、人のざわめきと、静かに眼を閉じる一羽の鶏の取り合わせの巧みは見のがせない。

観音奉納

只たのめ花もはらくあの通り

㊤ 文化六年句日記(文化6・3)・文政版発句集

▽ 句日記、前書「観音法楽」。中七「花ははらく」。

解 「当流ノ義ヲヨクコロヘタル信人ノ人」(御文章、文明5・2・8)の句とも評すべきだが、これは成立年代から推して、聞きかじった法話の一節によったと解すべきであろう。

▼ 勝峰『名句評釈』に、この句の成立年代を「晩年か晩年に近いものであらう」とした上で、「花の栄の一盛り、あの様にはらくと絶え間なく散つて行く。たのむまじきは此世の栄華、忘るまじきは未来の一大事、只一向専念に御仏にすがらなくてはならぬぞよと帰依法、帰依仏を勤めたものである」。伊藤『小林一茶集』に、「観世音菩薩の御詠と伝ふる『只たのめ

しめぢが原のさしも草われ世の中にあらんかぎりは』による。(新古今集には『なほたのめ』とある)。

山の月花盗人を照し給ふ

㊤ 八番日記(文政2・1)・おらが春・文政版発句集

注 「花盗人」、狂言『花盗人』では、桜の花を盗んで捕われた男が、「この春は花の下にて縄つきぬ烏帽子桜と人やいふらん」と詠んで許され、しかも酒のふるまいを受ける。涼袋に、「見たやうな花偷児はなぬすびとやころもがへ」。

解 山の上に昇った月が、花の小枝に手をのぼす人影を照し出している。声を掛けずにそっとしておこう、の意。

▼ 黒沢『研究』に、「山の月と云つてきて照し給ふと、つゝましく詠つたところ実に莊嚴な感じを醸し出します、而も一茶はその所謂風雅なるものにとらはれず静かに眺めてゐるところが非常にいゝと思ひます」。勝峰『名句評釈』に、「花盗人が普通の盗人と違つてゐる、ゐないは問題でない。月は美人も悪人も無差別平等に照被する。是非善悪を超越した宗教の醍醐味をこの句も歌つてゐると見るは非か」。勝峰『評釈おらが春』に、「よし、一ト枝、折れ。花盗人は風雅の神も咎めまい。いや、盗むのはむしろ花を愛する極地だ。愚問愚答をかさねながら、枝近くさし延べた手を擱んだのは月光だ。気がついて見れば満身にその光りを浴びてゐるのである。(中略)眺める人としてない山の月の森嚴さが、『照らしたたまふ』の敬語でいみじくも表現されてゐる」。川島『おらが春新解』に、『しばらくは花の上なる月夜かな』(芭蕉)―咲き満ちた花の上にかかつてゐる団々たる月が、しばらく運行を止めてゐるかのとき、天地一如の飽和状態を示している芭蕉の句を、地下に引きおろした観がある。しかも、花盗人を配しつつ、なお、景観の大きさの害われていないのは、『てらし給ふ』という敬語による森嚴にあると思う」。萩原『一茶名句』に、「盗む対象が『花』だからといって、それが倫理化されるはずはない。ところが日本には『風流』という特殊の觀念があつて、世間一般の習俗を超越した世間的の『美德』と考えられているところから、『風流』ごころのために、手をかけざるをえなかつたということを許容するばかりか、風流ごころのある証左としてこれを是認するという心理がある。それが『花盗人』である。この句『山の月花盗人を照らしたまふ』というのだから、お月さんはこの『花盗人』を是認して、『さあぞんぶんに折るがいい、手許を明くしてやるぞ』といつて照らしたまうという気持である」。宮本『大観』に、「山の桜の咲き満ちた空には春の月がまどかに照している。思わずその美しい一枝を折るべく手をさし伸べる。誰も見ている人はないが、そのひと時、満身に月光を浴びているのである。(中略)お月様はすべ

てをお見通しのように敵かにこの花盗人を照らし給うているといふのだ。芭蕉の句に『しばらくは花の上なる月夜かな』と
 いうのがあるが、一茶のはそういう美しい情景を、『花盗人』を配して彼一流の表現で人事化したものである」。

花のかげあかの他人はなかりけり

㊤ 李園あて書簡(文政2・2・25付)・八番日記(文政2・3)・おらが春・文政版発句集

解 爛漫たる桜花の下、等しくその花陰に心を開き春を満喫する。文政二年三月、一茶にとつては最も恵まれた時期でもあつた。

▼ 勝峰『名句評釈』に、「花の前にはすべての人が障壁を撤去する。みんなが花を中心にして浮世のあくたもくたを忘れ、人我の区別なしに興じあひ戯れあひ遊びあひ祝ひあふ。上下の隔も尊卑の別も老も若きも身内も他人も無い。みんなが花の前に花見る人となりきつてしまふ。平等無差別一視同仁の美酒に酔ふ」。勝峰『評釈おらが春』に、「万朶の花咲くさくらは、その木陰に立寄る人を悉く、なごやかにうちとけさせる魅力と、ふしぎな媒介性を持つてゐる。その花を眺めつゝその蔭に憩へば、あかの他人の俚語は無理に解消してしまふ。かうした一茶の主観的な解釈には、下心に一樹の蔭、一河の流れの仏教的な因縁を信ずればこそと思はれる」。川島『おらが春新解』に、「同じ花のかげに、同じ花を賞でようとして集まってくる人々に対して、思わず、横に広がっていく親近感である。一茶のために稀々おとずれる和やかな心境であり、救いの一と時であるとも言えようか。(中略)『あかの他人はなかりけり』は、一茶個人の感懐というよりも、むしろ民族化した宗教観ともいうべきであつて、この場合は、この言葉に、より多く興味を引かれていたと考えられる」。中島『小林一茶集』に、「花見に集まった人々が、おのずからに心なごみ、たがいに笑み交すさま」。

堪忍をいたしてゆくや花のかげ

㊤ 七番日記(文化11・3)・句稿消息・浅黄空・多羅葉経(文政1)・自筆句集・文政版発句集

▽ 中七「いたしにゆくや」の誤りであろう。七番日記以下いずれも中七「いたしにゆくや」。多羅葉経、前書「花さくら」。解 思いどおりにならないのが人の世である。花でも見て、さっぱりした気分を取りもどしたい、そんなつもりで花見に出かける、の意。この年の二月二十一日、長い間争い続けた父の遺産相続問題が最終的に決着、異母弟と母家を折半にした。翌

二十二日、小雨の中に家を出て隣村古間に泊っている。「勘忍」すべきことがあったのである。
 ▼ 川島『新釈』に、「いゝ加減には見過せない句である。腹立つ心をじつと押へ付けて、先づ一つ花でも見て来ようと思へるやうな余裕の出てくるまでには、人間もそれ／＼の修行を経なければならぬ。怒つた後の気まづさ。争つた後の心寂しさも、充分噛分けて知る人である。然し、発せられない憤りを胸に秘めて、我から慰めようとして花を仰いで居る人の心持ち、何といふ淋しさであらう」。

刈萱堂

花の世は地蔵ぼさつも親子かな

㊤ 文政版発句集

▽ 七番日記(文化15・3)・だん袋・浅黄空、中七「仏の身さへ」。自筆句集、前書なし。上五・中七「花の世〔は〕石の仏〔も〕」。希杖あて書簡(文化15・2・20付)、中七「仏の身にも」。

注 「刈萱堂」、長野市北石堂町にある浄土宗の寺。石童丸と刈萱上人ゆかりの寺と伝えられ、親子地蔵がある。

解 桜咲く季節、地蔵菩薩も親子連れだよ、の意。この年の五月、第二子誕生(長子は夭折)。その直前の作である。

花の木のもつて生れた果報かな

㊤ 文政版発句集・希杖本句集

▽ 文政句帳(文政5・3)、座五「あいそ哉」。

解 美しい花をつけたこの桜木、これこそ「もつて生れた」幸せというものであろう、の意。

大和めぐりする人に旅の真言といふをさづけて

かならずよ跡みよそばか花の雲

㊤ 浅黄空・自筆句集

▽ 浅黄空、前書「族立ニ送」。自筆句集、前書なし。七番日記(文化12・11)、前書「送雲水」。「藪の花迹みよソバカ必よ」。句稿消息、「藪の花迹みよそばか忘るゝな」(重出)。

注 「そばか」、蘇婆訶(svahaの音写)、功德あれ。成就あれかし、の意。『仏教語大辞典』に、「もとは、ヴェーダの祭祀において、神々に供物を捧げるときに唱えた文句。たとえば、『インドラ神にスヴァーハー。火神にスヴァーハー』というように唱えた。それが大乘仏教にとり入れられ、さらに真言密教において盛んに用いられるようになった」。
 解 旅中、苦労があっても、あなたの背後で、成就あれかしと願うもののあることを忘れなさんな、の意。

今の世や猫も杓子も花見笠

㊤ ほまち畑(文政8・2)・文政九・十年句帳写(文政9)・文政版発句集・発句鈔追加・希杖本句集

▽ ほまち畑、前書「花見笠」。

解 泰平の御代、だれもかれも、風流心などとはかかわりなく、花見にうかれている、の意。

有やうは我も花より団子かな

㊤ 七番日記(文化11・2)・斗圍あて書簡(文化11・3・24付)

▽ 浅黄空、上五・中七「正直ハおれも花より」。

解 風流人ぶっついても、その実態を問われれば、私自身も「花より団子」のたぐいである、の意。